LIFE 加算の未来を見据えた科学的介護とマネジメント

氏　　名　後藤　悠希

指導教員　工藤　一成

要旨

介護保険制度を持続可能なものとするための様々な取組みが模索されているが、介護を必要とする高齢者への良質なケアの提供と効率的な介護サービスの提供を両立するための方策として「介護の科学化」または「科学的介護」の推進に臨床現場においても政策論的にも大きな期待が寄せられている。社会保険の枠組みで提供するためには、給付の原因となる保険事故が科学的に定義され、保険給付としての介護サービスも因果関係が明確な科学的方法論として制度設計される必要があった。このようなことから介護保険制度はその制度設計の段階から「科学的介護」が標榜され、そのためのツールも試行錯誤されたのであるが、介護保険制度の発足とともに、要介護認定は保険給付のための制度的手続きの一部となってしまい、「科学的介護」は未だに形になっていない。しかし、近年の介護保険制度改革において LIFE 加算の仕組みが導入され、国においても現場においても、改めて「科学的介護」の必要性が強く意識されつつある。そこで本論文では、介護保険制度の歴史的背景を紐解きながら、「介護の科学化」に向けて、民間介護事業者や行政関係者が科学的介護の考え方や方法論をどのように意識しているかなどについてヒアリングとそれにもとづく質的分析と考察を行った。それらの分析と考察によって、「科学的介護」の概念や意味内容を再構築や科学的介護の実現に向けて、現在の介護保険制度の活用や民間介護事業の運営において、どのようなマネジメントが必要なのかについても考察した。ヒアリングとその分析に当たっては、半構造化インタビューによって聞き取った内容は、修正版グラウンデッドセオリー・アプローチのフレームワークによる Steps for Coding and Theorization 法を用いて分析した。それらの分析と考察から、科学的介護の概念と内実は例えば LIFE 加算のようなアセスメント項目の活用や介護の機械化、IT 化などにとどまらず、それらを総合化するとともに、介護サービスを必要とする対象者の心のありようを含む全人格的なケアの方法論として体系化することにあるものと考えられた。また、科学的介護を実践するための人材育成にあたっては、知識マネジメントにおける SECI モデルを援用することについても考察した。